

紫の上と秋

藤河家 利 昭

はじめに

紫の上は、源氏によれば春を好むとされている。それは紫の上が初めて登場するのが北山の桜が咲く頃であったことや、その容貌が桜に喩えられること、さらにその明朗な性質などから春という季節との関わりは深いと考えられる。^{注1}確かに源氏から求められた春の御方としての役割をその才覚によって存分にこなすのである。

これまでも紫の上と春、及び春の花との関係について論じられてきた。^{注2}特に紫の上が春に、秋好中宮が秋に配されたことについては、源氏にとつてはこの二人を中心として六条院が榮えていくようにとの布石と考えられる。^{注3}また紫の上にとつては六条院において中宮と並び立つだけの地位を認められたことになる。^{注4}針本正行氏は、少女巻の春秋争

いについて、「紫が自ら春の女性であると自覚し、春に内在していた人間の生の不安、苦悩を取り込むことを現実化させるもの」と捉えられている。^{注5}

ところで、紫の上自身について見れば、特に春を好む理由が示されているわけではない。藤田加代氏は「一体紫上は、春三月北山の小柴垣の中に始めてその姿を見せ、三十九歳の八月、物みな凋落にむかおうとする秋に死んだ人物で、比喩的に言えば、花の精霊にも似たイメージを持つている」と指摘されている。^{注6}

この論では、中宮の推測に従って、紫の上は春を好む以上秋が嫌いだったのではないかと考えてみる。それによつて紫の上にとつての秋という季節、さらに春という季節との関わりの意味を捉えてみたい。

一 秋好中宮と秋

御法の巻に、紫の上の死後に秋好中宮から源氏のもとに哀悼の文がある。中宮は紫の上の生前に春秋優劣争いをしたことがある。この文を手がかりとしたい。

冷泉院の後の宮よりも、あはれなる御消息絶えず、尽きせぬことども聞こえたまひて、

「枯れはつる野辺をうしとや亡き人の秋に心をとどめざりけん

今なんことわり知られはべりぬる」とありけるを、ものおぼえぬ御心にも、うち返し、置きがたく見たまふ言ふかひありをかしからむ方の慰めには、この宮ばかりこそおはしけれ、と、いささかのもの紛るるやうに思し続けるにも涙のこぼるるを、袖のいとまなく、え書きやりたまはず。

のほりにし雲るながらもかへり見よわれあきはてぬ常ならぬ世に
おし包みたまひても、とばかりうちながめておはす。

(四・五〇三)^{注7}

源氏の歌から、秋の終わった頃である。中宮は、紫の上が秋に亡くなったことを含んで、「枯れはつる野辺」を見て

秋の過ぎ去った寂しさと共に紫の上が亡くなった寂しさを感じて、紫の上が春を好み、従って秋に心を惹かれなかったと思われる、その心の中を推測したものである。これはあくまでも中宮の立場で、紫の上の心の中を自分に引き付けた見方であると言えるであらう。しかし、中宮の歌は自分の受け止め方であると共に、紫の上を思う源氏の心の中を思い遣ったものでもある。源氏の返歌ではそれに共感を示しながら、亡くなった紫の上の気持ちに應える形でそれを肯定しているように取ることが出来る。物語の局面が変化している点は考慮に入れなければならないが、この二人がそれぞれの紫の上に深く関わって来たことを思うと、この秋に心を惹かれないということは生前の紫の上の思いとして、遡って押し広げることも或いは可能ではないかと思われる。

致仕大臣が紫の上の亡くなったことを弔問する所に、「昔、大将の御母上亡せたまへりしもこのころの事ぞかし、と思し出づるに、いともの悲しく」(四・五〇〇)とある。紫の上が亡くなったのは八月十四日、野辺の送りが十五日の暁であり(四・四九七)、葵の上は野辺の送りが八月二十余日の有明であった(二・四二)。葵の上の場合、四十九日までの頃「時雨うちしてものあはれなる暮つ方」に頭中將

が来た時の源氏の様子は、「君は、西の妻戸の高欄におし
かかりて霜枯の前栽見たまふほどなりけり」(二・四八)と
ある。「霜枯の前栽」は葵の上の亡くなった悲しみをそそ
るものであろう。またその後で源氏が「枯れたる下草の中
に、龍胆、撫子などの咲き出でたるを折らせたまひて」、
大宮との歌の贈答がある。

(源氏) 草枯れのまがきに残るなでしこを別れし秋の
かたみとぞ見る

(大宮) 今も見てなかなか袖を朽すかな垣ほ荒れにし
大和なでしこ

(二・五〇)
これは前栽の草枯れであるが、秋が去つて草枯れになつて
いるのを見て、葵の上が亡くなった寂しさを感じているの
であらう。これは「枯れはつる野辺」に中宮が感じている
気持ちに通じる。なお宇治十帖では、八宮が八月二十日の
頃亡くなって忌も終わつた「時雨がちなる夕つ方」に、匂
宮から弔問がある。その中に「枯れゆく野辺もわきてなが
めらるるころになむ」(五・一八四)とある。これらは秋が
過ぎた寂しさに人が亡くなった寂しさを重ねて見ているの
である。

さて中宮はなぜこのように紫の上の心の中を推測するよ
うになつたのであろうか。この「野辺」は一般的なものと

も取れるが、中宮の六条院における住まいから考えると、
その秋の町の庭は次のように作られていた。

中宮の御町をば、もとの山に、紅葉の色濃かるべき植
木どもを添へて、泉の水遠く澄まし、遣水の音まさる
べき巖たて加へ、滝落として、秋の野を遙かに作りた
る、そのころにあひて、盛りに咲き乱れたり。嵯峨の
大堰のわたりの野山、むとくにけおされたる秋なり。

(三・七二―三)

この遙かに作つた秋の野は、旧六条御息所邸にも無かつた
ものであり、この秋の町を際立たせる特徴である。これは
源氏が中宮に春秋どちらを好むかと聞いた中に次のように
あることによると見られる。

春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人あらそひ
はべりける、そのころのげにと心寄るばかりあらはな
る定めこそはべらざなれ。(略)狭き垣根の内なりと
も、そのをりの心見知るばかり、春の花の木をも植ゑ
わたし、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の
虫をもすませて、人に御覽ぜさせむと思ひたまふるを、
いづ方にか御心寄せはべるべからむ (二・四五二)

源氏は、「春の花の林」と「秋の野の盛り」とを、それぞ
れ春秋を代表する通念的な美として挙げてゐる。それぞれ

の庭はこれを生かすように作られたのであろう。春の庭について、先ず「南の東は山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ」(三・七二)とある。しかし、この「秋の野を遙かに作りたる」に對比されているのは「南の東」の中では「御前近き前栽、五葉、紅海、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの、春のもてあそびをわざとは植ゑで」(同)と、秋の野と前栽とが対をなしていて、前者が、「嵯峨の大堰のわたりの野山」と比較されたように自然に近いのに対して、後者は人の手の加えられたものである。そして、「そのころにあひて」とあるように八月の頃は盛りであるとしても、その時期が過ぎた時の配慮はなされていない。これは春の町において、五葉が植えられていたり、「春のもてあそびをわざとは植ゑで、秋の前栽をばむらむらほのかにまぜたり」(同)と、殊更春が過ぎた後の配慮がなされているのと対照的である。これは夏の町でも「木高き森のやうなる木ども木深くおもしろく、(略)春秋の本草、その中にうちまぜたり」(三・七三)とあり、冬の町でも「隔ての垣に松の木しげく、(略)をさをさ名も知らぬ御山木どもの、木深きなどを移し植ゑたり」(三・七三、四)と、その季節が過ぎても生彩を失わないように配慮されていることからしても、秋の町は秋に偏向していることが分かる。これは

中宮の威光があるのでその必要がないとも考えられる。中宮の町の庭の特徴は野分の巻の冒頭にも引き継がれている。中宮の御前に、秋の花を植ゑさせたまへること、常の年よりも見どころ多く、色種を尽くして、よしある黒木赤木の籬を結びまぜつつ、同じき花の枝ざし姿、朝夕露の光も世の常ならず、玉かとかかやきて、造りわたせる野辺の色を見るに、はた春の山も忘れられて、涼しうおもしろく、心もあくがるるやうなり。

(三・二五五)

ここでも「造りわたせる野辺の色」は中宮の町の庭の特徴付けるものであり、ここに焦点が絞られている。また春の町の庭の景色、さらに春の季節と明確に対比されている。これに続く文にも、春の町の庭について「名だたる春の御前の花園」とある。

また鈴虫の巻で、秋の頃、出家した女三宮が住む寝殿と西の対を結ぶ渡廊の前の、仕切りの塀の東側を一面に野にして、そこに虫を放してその声を聞く場面がある。その時に源氏が宮に語る言葉の中に次のようにある。

秋の虫の声いづれとなき中に、松虫なんすぐれたるとて、中宮の、遙けき野辺を分けていとわざと尋ねとりつつ放たせたまへる、しるく鳴き伝ふるこそ少なか

れ。

(四・三六九)

この「遙けき野辺」は、これに続く文に、「(松虫は)心にまかせて、人間かぬ奥山、遙けき野の松原に声惜しまぬも」と隔て心ある虫になんありける」(同上)とあることからすると、六条院を離れた所を考えるべきであろうか。胡蝶の巻には中宮の季の御読経の初めの日に、紫の上からの歌に「花ぞのこてふをさへや下草に秋まつむしはうとく見るらむ」(三・一六四)と、中宮を松虫に喩えている。このように松虫を放したり、松虫が棲むことが、女三宮の住まいの庭が野にされたように、中宮の町の庭が野になつてゐることを際立たせてゐる。

ここで中宮が松虫を広い野から取つて来て庭に放したのは、中宮が齋宮であつた時に母六条御息所と一緒に野の宮にいた頃、源氏と御息所の別れの場面で「松虫の鳴きからしたる声」(二・八二)が御息所の歌の中で悲しみを添えるものとされていることが思い合はされる。齋宮にとつても特に先例があるわけでもない母と一緒に伊勢下向を直前にして、この松虫の声は心に残つていたものと考えられる。

このように見ると、中宮が「枯れはつる野辺」と言つたのは自分の庭の風景を見てのことである可能性が高い。そうであれば中宮は秋の野を遙かに作つた庭を見て暮らした

がら、紫の上が亡くなつた今初めて枯れ果てた秋の野辺の寂しさと人の世のはかなさを知り、紫の上の心がよく分かつたと言うのであろう。この庭には先に触れたように秋が過ぎた後への配慮はなされていなかった。それは中宮がこの認識を引き出すためであつたという作者の意図が窺われるように思われる。しかし、翻つて考えて見るに中宮はもともと秋を好んだと言えるのだろうか。確かに源氏との春秋の問答に答えにくいとは思ひながら全く返事をしないのも悪いと思つて次のように言う。

ましていかが思ひ分きはべらむ。げにいつとなき中に、あやしと聞きし夕べこそ、はかなう消えたまひにし露のよすがにも思ひたまへられぬべけれ (二・四五二)

中宮は母御息所の亡くなつた秋に、古今集の恋歌に歌われた人恋しい秋の夕べを重ねて答えたもので、特に季節自体についての考えがあつたわけではない。答えた後で後悔もしている。ただ、この季節の問答を通して中宮の唯一頼りにしていた母との絆と、現在の心細い身の上が示されている。この点は母を早くに亡くし、父式部卿宮も頼りにすることは出来ない紫の上の境遇と似通つてゐる。

こうして見ると中宮の秋に対する受け止め方は首尾一貫してゐないようである。しかし、最後は紫の上に同調する

形ではあるが、秋という季節を自分の身近な人との関わりにおいて見ている点は変わっていないと考えられる。この中宮の季節への関わり方は畢竟するに紫の上が何故春を好んだか、というより秋が嫌いだったかということの必然性を側面から証し立てるものではないかと考えられる。

ところで中宮は六条院に入る前に枯れた野辺の風景を目にしていたのである。齋宮として母御息所と共に野の宮にあつた時のことである。先に触れたように母が娘の齋宮と共に伊勢に下向する例が特になくともこの母娘の絆は深いと思われる。若い齋宮にとつて一年程の野の宮における嵯峨野の風景は印象深いものだったと想像される。これは六条院の中宮の秋の野を遙かに作っていることと関わりがあるかも知れない。嵯峨野の風景が引き合いに出されたのも意味を持つのであろうか。源氏が野の宮を訪れたのは九月七日の頃であり、齋宮の伊勢下向も迫っている。葵の巻に「九月には、やがて野の宮に移ろひたまふべければ」(二・三〇)とあり、また「深き秋のあはれまさりゆく風の音身にしみけるかな」(二・四四)とある場面で、「野宮の移ろひのほどにも」(二・四七)とある。九月に宮中の初齋院から野の宮に移ったことが分かる。賢木の巻では「(九月)十六日、桂川にて御祓したまふ」(二・八三)

とあるので、それ以前は野の宮にいたことが分かる。

はるけき野辺を分け入りたまふよりいとものあはれなり。秋の花みなおとろへつつ、浅茅が原もかれがれる虫の音に、松風すごく吹き合はせて、そのことも聞きわかれぬほどに、物の音ども絶え絶え聞こえたる、いと艶なり。

(二・七七)

この風景によれば、齋宮は秋の嵯峨野が枯れていく頃、野の宮に入り、またその頃に野の宮を出たことになる。秋の枯れた野は齋宮にとつて印象深い風景だったと考えられるのである。中宮の町は六条御息所の旧邸跡に作られたものであり、庭においても元の山を生かしながら、思ひ出深い野の宮の周囲の風景を取り入れようとするのは考え得ることであろう。そうすると中宮の庭は母御息所との絆の深さを留めておく意味があつたと考えられる。しかし、それは母が生きていた時に見た風景だったのであり、自分一人で見ただけではなかった。

さて初めの贈答歌に返ると、両者に受け止め方の違いはあるにしても、中宮の「枯れはつる野辺」は、源氏の返歌では下句からすると秋の過ぎ去った後の物寂しい風景に無常な世の中を感じさせるものとしている点は基本的に一致している。生前の紫の上も同様に感じたのであろうと思わ

れるが、季節の受け止め方という点で見ると、中宮の方に近いと考えられる。この二人には先に触れたように境遇の上でも類似性がある。

ところで同じ源氏の妻として六条院に住む女三宮も秋を厭うようになったのである。先に触れた、その寝殿と西の対を結ぶ渡廊の前の、仕切りの塀の東側を源氏が一面に野にして、そこに虫を放し、八月十五夜その声を聞く場面がある。源氏と尼になった女三宮の贈答歌である。

(女三宮) おほかたの秋をばうしと知りにしをふり棄てがたきすず虫の声

(源氏) こころもて草のやどりをいとへどもなはず

ず虫の声ぞふりせぬ (四・三七〇)

この「秋」は、女三宮が出家した理由を語る中に示されている。

人目にこそ変ることなくもてなしたまひしか、内にはうきを知りたまふ気色しるく、こよなう変りにし御心を、いかで見えたてまつらじの御心にて、多うは思ひなりにし御世の背きなれば、

(四・三六八)

女三宮は尼になっただけでなく、なお諦められない源氏から離れて六条院を出たいと思っている。そして、宮が見ている現実の秋の風景はこの宮の住まいの前に広がっている

秋の野である。それを踏まえて秋を厭わしいとしているのであろう。ここはかつて紫の上が女主人として住んでいた春の町の庭の一角である。宮の秋、或いは秋の野に対する受け止め方は紫の上にも通じていると考えられる。

一 紫の上と秋

次に紫の上が秋という季節をどのように受け止めていたかを探ってみたい。紫の上は祖母の尼君を、「たちぬる月の二十日のほどになむ、つひにむなく見たまへなして」(二・三二四)とあるように九月二十日の頃に亡くしている。紫の上は母の愛情を殆ど知らずに育ったと考えられ、「亡くなりにはべりしほどにこそはべりしか(一・二八八)」、父兵部卿宮とも離れて暮らしていた。祖母を慕う気持ちは次のようである。

行く先の身のあらむことなどまでも思し寄らず、ただ年ごろたち離るるをりなうまつはしならひて、今は亡き人となりたまひにける、と思すがいみじきに、幼き御心地なれど、胸つとふたがりて、例のやうにも遊びたまはず、昼はさても紛らはしたまふを、夕暮となれば、いみじく屈したまへば、かくてはいかでか過ごしたまはむ、と慰めわびて、乳母も泣きあへり。

この尼君の死は物心ついた紫の上に初めての大きな悲しみを齎したのであり、それは晩秋であつた。季節に対する紫の上の感情が示されているわけではないが、晩秋の物寂しい季節である九月二十日の頃に尼君の死が設定されていることが注意される。紫の上により心細さを深くしていると考えられる。それと共に紫の上がこのままでは暮らしていけないような状態になつて^{注。}いる。このように紫の上が塞ぎこんでいることが源氏に引き取られる伏線にもなる。即ち源氏との関係の出発点はこの尼君の死と大きく関わっているのである。二条院の西の対に引き取られた紫の上の様子を描いた部分である。

君は、男君のおはせずなどしてさうさうしき夕暮などばかりぞ、尼君を恋ひきこえたまひて、うち泣きなどしたまへど、宮をばことに思ひ出できこえたまはず、もとより見ならひきこえたまはでならひたまへれば、今はただこの後の親を、いみじう睦びまつはしきこえたまふ。

(一・三三五―六)

「後の親」とあるように、源氏は尼君の担つていた役割をそのまま引き継ぐ形になつてゐる。これは源氏と紫の上との関係の基盤をなすものと考えられる。また紫の上自身の

柔軟性と共にそれと表裏の、心細さに敏感な性質を窺わせるのである。これはその後も同様である。

姫君は、なほ時々思ひ出できこえたまふ時、尼君を恋ひきこえたまふをり多かり。君のおはするほどは紛らはしたまふを、夜などは、時々こそとまりたまへ、こかしこの御いとまなくて、暮るれば出でたまふを、慕ひきこえたまふをりなどあるを、いとらうたく思ひきこえたまへり。二三日内裏にさぶらひ、大殿にもおはするをりは、いといたく屈しなどしたまへば、心苦しうて、母なき子持たらむ心地して、歩きも静心なくおぼえたまふ。

(一・三八九―九〇)

源氏は殆ど尼君の代わりになり得ているといつてよい。またそうでなければ源氏との関係も成り立たなかつたであろう。尼君の死は紫の上にとって大きな出来事であり、それは源氏と紫の上との将来にとつても重要な意味を持つことになる。

尼君が源氏と紫の上の関係に関わりを持つと考えられるのは次の点である。葵の巻に祭り見物に出る時に源氏が紫の上の髪を削ぎ、「はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆく末は我のみぞ見む」(二・二二)と、紫の上の将来を自分保証すると詠む場面がある。ここには尼君のことは触

れられていないが、これは若紫の巻で源氏が紫の上をかいま見する場面で、尼君が紫の上の髪をかき撫で、「おひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむ空なき」(二・二八二)と、将来を案じたことと対応していると考えられる。源氏は尼君の不安な気持ちを受け止めているのである。また二人が結婚したことについても、「少納言なども、人知れず、故尼上の御祈りのしるしと見たてまつる」(二・九五)とある。

次に源氏との関わりの中で紫の上が秋をどう見ていたかを見ていく。源氏は藤壺の宮の薄情さに所在なく茫然として「秋の野も見たまひがてら」(二・一〇八)雲林院に参詣し二三日滞在する。源氏は紫の上が気にかかつて文を書くが、その時の贈答歌である。

あさぢふの露のやどりに君をおきて四方の嵐ぞ静
心なき

などこまやかなるに、女君もうち泣きたまひぬ。御返り、白き色紙に、

風吹けばまづぞみだるの色かはるあさぢが露にか
かるささがに

とのみあり。(二・一一〇)

紫の上はこの秋の野を直接見ているわけではない。また源

氏が実際に見たのは、「紅葉やうやう色づきわたて、秋の野のいとなまめきたるなど見たまひて」(二・一〇九)という様子で、「色かはる」という状態になっているとは言えないが、そこに紫の上の不安な気持ちが出ているのであろう。既に紫の上は、「この女君のいとうたげにて、あはれにうち頼みきこえたまへるを」(二・一〇五)と、源氏を頼りにするようになっていく。紫の上は枯れて変色した浅茅を心変わりした源氏に、その浅茅の上に置く露にかかると蜘蛛の糸が風に吹かれて乱れているのを自分に喩える。この歌には源氏を頼りにする外はない、また全て源氏次第の心細く不安定な身の上が示されている。紫の上は一人取り残されて扱ひ所を失っている姿を枯れた秋の野の風景の中に見ていたと考えられる。このような紫の上の不安は源氏によっても受け止められている。

女君は、日ごろのほどに、ねびまさりたまへる心地して、いといたうしづまりたまひて、世の中いかがあらむと思へる気色の、心苦しうあはれにおぼえたまへば、あいなき心のさまざま乱るるやしるからむ、「色かはる」とありしもうたうおぼえて、常よりことに語らひきこえたまふ。(二・一一三)

源氏は自分の藤壺の宮への思いが紫の上に心配をかけるの

を認めざるを得ない。それは源氏にとつて抜きがたいものである。そのことが紫の上に不安を齎らすのであらう。そして秋という季節は人の心の厭きをかけるだけでなく、もつと存在に関わる不安として秋の風景が捉えられている。源氏は「世の中」の問題として見ているが、紫の上にとつては自らの拠り所に対する不安なのである。

秋の季節が紫の上にとつて同様な意味合いを明確に持つのは女三宮の降嫁によつてである。紫の上が初めて女三宮に対面した時の手習いに源氏が書き添えたものである。

(紫の上) 身にちかく秋や来ぬらん見るままに青葉の
山もうつろひにけり

(源氏) 水鳥の青羽はいろもかはらぬをはぎのした
こそけしきことなれ (四・八二)

紫の上は、源氏が臘月夜との縫りを再び戻したことにについて、「昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」(四・七八)と、宮の降嫁によつて頼るもののない身の上であることを訴えている。ここでも青葉の山が直接目にされているわけではないようである。この歌によつて季節を知ることが出来るのである。「青葉の山」はより端的に源氏の比喩である。このように秋の風景が源氏を示していることは前と同じである。しかも女三宮は朱雀院皇女で

あり、藤壺の宮の姪である。その人柄は幼いものの源氏は「よその思ひはいとあらまほしきほどなりかし」(四・六七)と思つていたのである。このような立場に置かれた際に秋の風景が持ち出されている点に注意する必要がある。この二人の歌は女三宮が降嫁して三日目の夜の二人の歌に対応している。これは紫の上が硯に向かつて書いた歌に源氏が詠んだものである。

(紫の上) 目に近く移ればかはる世の中を行くすと
ほくたのみけるかな

(源氏) 命こそ絶ゆとも絶えめさだめなき世の常な
らぬなかのちぎりを (四・五八)

これは二人の仲の頼みがたさが詠まれているのに対して、前の紫の上の歌では源氏の心変わりを我が身との関わりにおいて捉えながら、それを客観的に見ているところが、源氏との距離はより離れている。その後紫の上は、自分の人生を見極めたように思い(四・一五九)、また源氏の愛情もいずれば衰えることを予測して出家を望むようになる(四・一六九)。そして女楽の後自分の境涯を、「あやしく浮きても過ぐしつるありさま」(四・二〇三)などと拠り所のない身の上を嘆き、そのまま発病している。

なお紫の上と冬の季節との関わりについては、先の藤田

氏の論に指摘がある。^{注9}

このような立場に置かれた不安を、同様に秋の風景に寄せて訴えたのは常夏の女である。

うち払ふ袖も露けきとこなつに風吹きそふ秋も来にけり
(二・一五九)

この常夏の女の立場は次のように述べられている。

親もなく、いと心細げにて、さらばこの人こそはと、事にふれて思へるさまも、らうたげなりき。かうのどけきにおだしくて、久しくまからざりしころ、この見たまふるわたりより、情けなくうたであることをなさんさる便りありて、かすめ言はせたりける、後にこそ聞きはべりしか。
(一・一五七―八)

心細い身の上で、頭中将を頼りにしていること、勢力のある北の方の実家から圧迫を受けること等、紫の上の場合と似通うところがある。常夏の女は、頭中将がとだえをおいていることに加えて、秋の嵐で常夏が倒れ伏すように、自分の圧倒されてしまうことを訴えている。そして、結局は頭中将の前から姿を消すのである。

結婚することはなかったが、源氏との贈答歌によつて示される朝顔の前斎院の身の上は紫の上にも通じるところが

ある。

(源氏) 見しをりのつゆわすられぬ朝顔の花のさかりは過ぎやしぬらん

(朝顔) 秋はてて霧のまがきにむすばほれあるかなきかにうつる朝顔
(二・四六六)

この朝顔は、源氏の家の庭の「枯れたる花どもの中に、朝顔のこれかれに這ひまつはれて、あるかなきかに咲きて、にほひもことに変れるを」(二・四六六)とあつたものである。衰えて色の変つた朝顔に容色の衰えが喩えられているが、源氏とも結婚することなく、また父式部卿宮が亡くなつた心細さも関わっているであろう。

三 紫の上と春

紫の上は春にふさわしく、また春にその才覚を存分に発揮している。自らも「君の、春の曙に心しめたまへるものとわりにこそあれ」(二・四五四―五)という源氏の言葉によつて春を好んだことが分かる。しかし、その実体はいかなるものであつたのであろうか。

源氏が北山を訪れて若紫をかいま見たのは、「三月のつごもり」(二・二七三)であつた。その時に見た尼君と大人の女房との贈答歌である。

(尼君) おひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき

(大人) 初草のおひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらむ (一・二八二)

「若草」や「初草」は、紫の上の清新な姿をも表していると思われるが、その生い立ってゆく先、即ち紫の上がどこの誰と暮らすことになるか分からない不安なものである。

これは尼君の若紫への言葉、「ただ今おのれ見棄てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」(一・二八二)を受け、尼君がいなければ現在も生きていくこと自体危ぶまれる心細い存在なのである。この贈答歌は伊勢物語四十九段の男とその妹の贈答歌、「うら若み寝よげに見ゆる若草をひとの結ばむことをしぞ思ふ」「初草のなごめづらしき言の葉ぞうらなく物を思ひけるかな」を踏まえながらも、その意味は全く異なっており、現在と将来に不安を抱える心細い存在を意味している。

京に帰った源氏から尼君に贈られた文の中にあつた紫の上宛の文と、尼君の答の歌である。

中に小さくひき結びて、

(源氏) 「面影は身をも離れず山ざくら心のかぎりとめて来しかど

夜の間の風もうしろめたくなむ」とあり。(略) しても、

(尼君) 嵐吹く尾上の桜散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ

いとどうしろめたう。

とあり。 (一・三〇二―三)

源氏が「朝まだき起きてぞ見つる梅の花夜の間の風のうしろめたさに」(「拾遺集」巻一、春 元良親王^{注10})を踏まえて、桜を散らす「風」と言ったのに対し、尼君は「嵐」と返している。紫の上を源氏に託す際に起こり得る不安を危惧している。紫の上ははなやかな桜に喩えられる反面、嵐によつて無残に散らされてしまふはかなさを併せ持っているのである。これは先に挙げた、常夏の女の歌にも通じるものである。

「秋の末つ方」の頃、「秋の夕べ」に源氏は藤壺の宮のことを思って、ゆかりの紫の上を引き取りたい気持ちもまさる。

手に摘みていつしかも見む紫のねにかよひける野辺の若草 (一・三二四)

この歌は「紫の一本ゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」(「古今集」巻十七、雑上 読人しらす^{注11})を踏まえ

て、「武蔵野の草」から「野辺の若草」が出ていると見られる。ここでは紫のゆかりという制約があり、紫の上の立場はそれに規制されざるを得ない。秋の夕べは源氏にとって物思いの時であるが、「若草」である紫の上には秋の終わりの季節はそぐわないものである。また野の中に一人置かれた心細い趣もある。「枯れ果つる野辺」は「野辺の若草」と首尾対応しているのではないかと思われる。紫の上が後に不幸に陥るのはやはり紫のゆかりである女三宮の降嫁によるのである。

それでは紫の上自身は春をどのように受け止めていたのであろうか。六条院に女君達が移った後で、秋好中宮から紫の上のもとへ紅葉の便りがある。「九月」になった頃である。

御消息には、

(中宮) ころから春まつ苑はわがやどの紅葉を風のつてにだに見よ

若き人々、御使もてはやすきまどもをかし。御返りは、この御箱の蓋に苔敷き、巖などの心ばへして、五葉の枝に、

(紫の上) 風に散る紅葉はかろし春の色を岩ねの松にかけてこそ見ぬ

この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬつくりごとどもなりけり。(三・七六)

これに続いて紫の上の即興の才覚を中宮が感心するという文が続くが、紫の上が紅葉を軽いとし、その反面で「春の色」を「岩根の松」の作り物に寄せて永久に変わらないものとすることを願っていることが注意される。そこには中宮を寿ぐ心と共に、自らの今の幸福が続くようにとの願いも込められているのであろう。

六条院に移って初めての新春の源氏と紫の上の祝い言である。

(源氏) うす氷とけぬる池の鏡には世にたぐひなき

かげぞならべる

げにめでたき御あはひどもなり。

(紫の上) くもりなき池の鏡によろづ代をすむべきか
げぞしるく見えける

何ごとにつけても、未遠き御契りを、あらまほしく聞こえかはしたまふ。今日は子の日なりけり。げに千年の春をかけて祝はむに、ことわりなる日なり。

(三・一三九)

源氏の歌がこの上ない二人の仲を自賛するのに対し、紫の上は永久に二人の仲が続くことを願っている。むしろ紫の

上の願いの方が強く出ている。「げに千年の春を云々」はそれを受けた言い方である。

「三月の二十日あまりのころほひ」、秋好中宮の季の御読経の初めの日、今度は紫の上から中宮に春の便りがある。

(紫の上) 花ぞののこてふをさへや下草に秋まつむし
はうとく見るらむ

(中宮) こてふにもさそはれなまし心ありて八重山
吹をへだてざりせば (三・一六四、五)

この胡蝶は、中宮のもとに花を奉った童女が蝶の装束をしていること、さらに蝶の楽の舞とも関係している。蝶の楽の舞と鳥の楽の舞は極楽の舞である。この春の町は「生ける仏の御国とおぼゆ」(三・一三七)とあつた。極楽の世界を演出しようとするところに、春の町の「常よりことに尽くしてはふ花の色」(三・一五七)を誇ると共に、それを永遠のものにしたいという願いが見られる。

このように紫の上は、春にあつてその「春の色」を永久に変わらないものとし、また「千年の春」を願い、さらに極楽の世界のように永遠なものを求める。そこには一貫して今の幸福が永久に続く事を求める心が込められていると見られる。

おわりに

紫の上は春の御方として才覚を発揮するところにその本領が見られる。紫の上は生彩ある春の季節を好み、またその春の色を不変のものにしたいと願っている。しかし、春は季節の移ろい易さを内在させていて、それは紫の上自身の存在のはかなさにも通じていると見られる。そのことは紫の上も自覚していることであると見られる。一方でこのような紫の上の春への関わり方を生み出した背景としては、源氏との関係の始まりの時点から秋という凋落の季節を通して自身の拠り所のなさを知っていたからであると考えられる。即ち春への関わり方と秋の受け止め方は表裏一体のものである。秋好中宮は、紫の上が春を好む以上に秋を嫌っていたことの妥当性を裏付ける役割を持っている。源氏もまた紫の上の秋の季節の受け止め方に同調せざるを得ないのである。春秋優劣争いという古来の問題を物語の女主人公の中に一体化して問い直し、季節をその存在の拠り所に関わりを持つものとして追求したところに意義が認められる。

注2 倉田 実氏「紫上と春」(「明治大学大学院紀要」第一九集 昭和五十七年二月)

三田村雅子氏「紅梅の美」(「講座 源氏物語の世界」第六集 昭和五十六年十二月)

藤田加代氏「『梅』『桜』『柳』のイメージ——源氏物語における人物造型試論として——」(「日本文学研究」第二十四号 昭和六十一年十二月)

阿部好臣氏「紫上と桜——その二度の死をめぐる——」(「語文」第七十輯 昭和六十三年三月)

「源氏・寝覚の花の喻——その表現史的逆出——」(「日本文学」昭和五十七年九月)

注3 鈴木日出男氏「六条院創設」(「中古文学」第十四号 昭和四十九年十月)

注4 注1に同じ。

注5 「少女卷の春秋論」(「中古文学」第十八号 昭和五十一年九月)。同氏「春秋争い」(「講座 源氏物語の世界」第五集 昭和五十六年八月)にも関連する論がある。

注6 「『あぢきなき』思い 紫上の想念を中心にして」(「日本文学研究」第二十二号 昭和五十九年十二月)

注7 源氏物語本文の引用は日本古典文学全集により、冊数と頁数を示す。以下同じ。

注8 宇治十帖では、「八月二十日のほど」に父八宮を亡くし、九月を迎えた大君、中君の様子が、「野山のけしき、まして袖の時雨をもよほしがちに、ともすればあらそひ落つる

木の葉の音も、水の響きも、涙の滴もひとつもののやうにくれまどひて、かうては、いかでか限りあらむ御命もしばしめぐらひたまはむ、とさぶらふ人々は心細く、いみじく慰めきこえつつ思ひまどふ。」(五・一八三)とあるのが参考になる。

注9 注6の論文に「彼女の映像が物語の表面に大写しになるとき、多く冬枯れや雪、凍てつく寒気などという環境を設定したのは、彼女の置かれている状況の『寒さ』『可酷さ』を暗示するものであろう」とある。

注10 「新編国歌大観」第一卷 勅撰集編による。

注11 注10に同じ。